

鴻外選集
161

雁灰燼

鷗外選集 6

雁・灰燼

昭和二十四年十月五日
昭和二十四年十月廿五日

印刷
發行

陽外遺集 第六卷

定價二七〇圓

著者 森 林 太 郎

發行者 東京都千代田區神田神保町一ノ一七
大 橋 勇 夫

印刷者 京都市中京區壬生花井町三
鈴 木 直 樹

發行所 東京都千代田區神田神保町一ノ一七
東 京 堂

振替東京二七〇番



(印刷 日本寫真印刷株式會社)

雁

壹

古い話である。僕は偶然それが明治十三年の出来事だと云ふことを記憶してゐる。どうして年をはつきり覚えてゐるか云ふと、其頃僕は東京大學の鐵門の眞向ひにあつた、上條かみでうと云ふ下宿屋に、此話の主人公と壁一つ隔てた隣同士になつて住んでゐたからである。その上條が明治十四年に自火じくわで焼けた時、僕も焼け出された一人いちにんであつた。その火事のあつた前年の出来事だと云ふことを、僕は覚えてゐるからである。

上條に下宿してゐるものは大抵醫科大學の學生ばかりで、其外は大學の附屬病院に通ふ患者なんぞであつた。大抵どの下宿屋にも特別に幅を利かせてゐる客があるもので、さう云ふ客は第一金廻りが好く、小氣こきが利きいてゐて、お上さんが箱火鉢を控へて据わつてゐる前の廊下を通るときは、きつと聲を掛ける。時々はその箱火鉢の向側にしやがんで、世間話の一つもする。部

屋で酒盛をして、わざ／＼肴を拵へさせたり何かして、お上さんに面倒を見させ、我儘をするやうでゐて、實は帳場に得の附くやうにする。先づぎつとかう云ふ性の男が尊敬を受け、それに乗じて威福を擅にすると云ふのが常である。然るに上條で幅を利かせてゐる、僕の壁隣の男は頗る趣を殊にしてゐた。

此男は岡田と云ふ學生で、僕より一學年若いのだから、兎に角もう卒業に手が届いてゐた。岡田がどんな男だと云ふことを説明するには、その手近な、際立つた性質から語り始めなくてはならない。それは美男だと云ふことである。色の蒼い、ひよろ／＼した美男ではない。血色が好くて、體格ががつしりしてゐた。僕はあんな顔の男を見たことが殆ど無い。強ひて求めれば、大分あの頃から後になつて、僕は青年時代の川上眉山と心安くなつた。あのとう／＼窮境に陥つて悲慘の最期を遂げた文士の川上である。あれの青年時代が一寸岡田に似てゐた。尤も當時競漕の選手になつてゐた岡田は、體格では過かに川上なんぞに優つてゐたのである。

雁
容貌は其持主を何人にも推薦する。併しそればかりでは下宿屋で幅を利かすことは出来ない。そこで性行はどうかと云ふと、僕は當時岡田程均衡を保つた書生生活をしてゐる男は少からう

と思つてゐた。學期毎に試験の點數を爭つて、特待生を狙ふ勉強家ではない。遣る丈の事をちやんと遣つて、級の中位より下には下らずに進んで來た。遊ぶ時間は極つて遊ぶ。夕食後に必ず散歩に出て、十時前には間違なく歸る。日曜日には舟を漕ぎに行くか、さうでないときは遠足をする。競漕前に選手仲間と向島に泊り込んでゐるとか、暑中休暇に故郷に歸るとかの外は、壁隣の部屋に主人のゐる時刻と、留守になつてゐる時刻とが狂はない。誰でも時計を號砲ごうぽうに合せることを忘れた時には岡田の部屋へ問ひに行く。上條の帳場の時計も折々岡田の懷中時計に據つて匡ただされるのである。周圍の人の心には、久しく此男の行動を見てゐればゐる程、あれは信賴すべき男だと云ふ感じが強くなる。上條のお上さんがお世辭を言はない、破格な金遣ひをしない岡田を褒め始めたのは、此信賴に本づいてゐる。それには月々の勘定をきちんとすると云ふ事實が與かつて力あるのは、ことわるまでもない。

「岡田さんを御覽なさい」と云ふ詞が、屢々お上さんの口から出る。

「どうせ僕は岡田君のやうなわけには行かないさ」と先を越して云ふ學生がある。此の如くにして岡田はいつとなく上條の標準的下宿人になつたのである。

岡田の日々の散歩は大抵道筋が極まつてゐた。寂しい無縁坂を降りて、藍染川のお齒黒のやうな水の流れ込む不忍しのばすの池の北側を廻つて、上野の山をぶらつく。それから松源まつげんや雁鍋がんたべのある廣小路、狭い賑やかな仲町を通つて、湯島天神の社内に這入つて、陰氣な臭橋寺からたちでらの角を曲がつて歸る。併し仲町を右へ折れて、無縁坂から歸ることもある。これが一つの道筋である。或る時は大學の中を抜けて赤門に出る。鐵門は早く鎖されるので、患者の出入する長屋門から這入つて抜けるのである。後に其頃の長屋門が取り拂はれたので、今春木町から衝つき當る處にある、あの新しい黒い門が出来たのである。赤門を出てから本郷通りを歩いて、栗餅きやくつきの曲櫓まがらをしてゐる店の前を通つて、神田明神の境内に這入る。そのころまで目新めがねししかつた目金橋めがねはしへ降りて、柳原の片側町を少し歩く。それからお成道なりみちへ戻つて、狭い西側の横町のどれかを穿つて、矢張臭橋寺からたちでらの前に出る。これが一つの道筋である。これより外の道筋はめつたに歩かない。

雁
此散歩の途中で、岡田が何をするかと云ふと、ちよい／＼古本屋の店を覗いて歩く位のものであつた。上野廣小路と仲町との古本屋は、その頃のが今も二三軒残つてゐる。お成道にも當時その儘の店がある。柳原のは全く廢絶してしまつた。本郷通のは殆ど皆場所も持主も代つてゐ

る。岡田が赤門から出て右へ曲ることのめつたにないのは、一體森川町は町幅も狭く、窮屈な處であつたからでもあるが、當時古本屋が西側に一軒しかなかつたのも一つの理由であつた。

岡田が古本屋を覗くのは、今の詞で云へば、文學趣味があるからであつた。併しまだ新しい小説や脚本は出てゐぬし、抒情詩では子規の俳句や、鐵幹の歌の生れぬ先であつたから、誰でも唐紙に摺つた花月新誌や白紙に摺つた桂林一枝のやうな雑誌を讀んで、槐南、夢香なんぞの香奩體の詩を最も氣の利いた物だと思ふ位のものであつた。僕も花月新誌の愛讀者であつたら、記憶してゐる。西洋小説の翻譯と云ふものは、あの雑誌が始めて出したのである。なんでも西洋の或る大學の學生が、歸省する途中で殺される話で、それを談話體に譯した人は神田孝平さんであつたと思ふ。それが僕の西洋小説と云ふものを讀んだ始であつたやうだ。さう云ふ時代だから、岡田の文學趣味も漢學者が新しい世間の出來事を詩文に書いたのを、面白がつて讀む位に過ぎなかつたのである。

僕は人附合ひの餘り好くない性であつたから、學校の構内で好く逢ふ人にでも、用事がなくては話をしない。同じ下宿屋にゐる學生なんぞには、帽を脱いで禮をするやうなことも少かつ

た。それが岡田と少し心安くなつたのは、古本屋が媒なかだちをしたのである。僕の散歩に歩く道筋は、岡田のやうに極まつてはゐなかつたが、脚が達者で縦横に本郷から下谷、神田を掛けて歩いて、古本屋があれば足を止めて見る。さう云ふ時に、度々岡田と店先で落ち合ふ。「好く古本屋で出くはすぢやないか」と云ふやうな事を、どつちからか言ひ出したのが、親しげに物を言つた始である。

其頃神田明神前の坂を降りた曲角に、鉤かぎなりに縁臺を出して、古本を曝してゐる店があつた。そこで或る時僕が唐本の金瓶梅きんぺいばいを見附けて亭主に値を問ふと、七圓だと云つた。五圓に負けてくれと云ふと、「先刻岡田さんが六圓なら買ふと仰やいましたが、おことわり申したのです」と云ふ。偶然僕は工面が好かつたので言値で買つた。二三日立つてから、岡田に逢ふと、向うからかう云ひ出した。

「君はひどい人だね。僕が切角見附けて置いた金瓶梅を買つてしまつたぢやないか。」

「さうく君が値を附けて折り合はなかつたと、本屋が云つてゐたよ。君欲しいのなら譲つて上げよう。」

「なに。隣だから君の讀んだ跡を貸して貰へば好いさ。」

僕は喜んで承諾した。こんな風で、今迄長い間壁隣に住まひながら、交際せずにもた岡田と僕とは、往つたり來たりするやうになつたのである。

一 貳

その頃から無縁坂の南側は岩崎の邸であつたが、まだ今のやうな巍々たる土塀で圍つてはなかつた。きたない石垣が築いてあつて、苔蒸した石と石との間から、齒朶しだや杉朶が覗いてゐた。あの石垣の上あたりは平地だか、それとも小山のやうにでもなつてゐるか、岩崎の邸の中に這入つて見たことのない僕は、今でも知らないが、兎に角當時は石垣の上の所に、雜木が生えた程生えて、育ちたい程育つてゐるのが、往來から根まで見えてゐて、その根に茂つてゐる草もめつたに刈られることがなかつた。

坂の北側はけちな家が軒を並べてゐて、一番體裁の好いのが、板塀を繞らした、小さいしもた屋、その外は手職をする男なんぞの住ひであつた。店は荒物屋に烟草屋位しかなかつた。中

に往來の人の目に附くのは、裁縫を教へてゐる女の家で、晝間は格子窓の内に大勢の娘が集まつて爲事をしてゐた。時候が好くて、窓を明けてゐるときは、我々學生が通ると、いつもべちやくちや盛んにしゃべつてゐる娘共が、皆顔を擧げて往來の方を見る。そして又話をし續けたり、笑つたりする。その隣に一軒格子戸を綺麗に拭き入れて、上がり口の叩きに、御影石を塗り込んだ上へ、折々夕方に通つて見ると、打水のしてある家があつた。寒い時は障子が締めてある。暑い時は竹簾が卸してある。そして爲立物師したもののしの家の賑やかな爲めに、此家はいつも際立つてひっそりしてゐるやうに思はれた。

此話の出來事のあつた年の九月頃、岡田は郷里から歸つて間もなく、夕食後に例の散歩に出て、加州の御殿の古い建物に、假に解剖室が置いてあるあたりを過ぎて、ぶら／＼無縁坂を降り掛かると、偶然一人の湯歸りの女が彼爲立物師の隣の、寂しい家に這入るのを見た。もう時候が大ぶ秋らしくなつて、人が涼みにも出ぬ頃なので、一時人通りの絶えた坂道へ岡田が通り掛かると、丁度今例の寂しい家の格子戸の前まで歸つて、戸を明けようとしてゐた女が、岡田の下駄の音を聞いて、ふいと格子に掛けた手を停めて、振り返つて岡田と顔を見合せたのであ

る。

紺縮の單物に、黒縮子と茶獻上との腹合せの帶を締めて、織い左の手に手拭やら石鹼箱やら糠袋やら海綿やらを、細かに編んだ竹の籠に入れたのを懈げに持つて、右の手を格子に掛けた儘振り返つた女の姿が、岡田には別に深い印象をも與へなかつた。併し結ひ立ての銀杏返しの鬢が蟬の羽のやうに薄いのと、鼻の高い、細長い、稍寂しい顔が、どこかの加減か額から頬に掛けて少し扁たいやうな感じをさせるのが目に留まつた。岡田は只それ丈の刹那の知覺を閱歷したと云ふに過ぎなかつたので、無縁坂を降りてしまふ頃には、もう女の事は綺麗に忘れてゐた。

併し二日ばかり立つてから、岡田は又無縁坂の方へ向いて出掛けて、例の格子戸の家の近く來た時、先きの日の湯歸りの女の事が、突然記憶の底から意識の表面に浮き出したので、その家の方を一寸見た。豎に竹を打ち附けて、横に二段ばかり細く削つた木を渡して、それを蔓で卷いた肱掛窓がある。その窓の障子が一尺ばかり明いてゐて、卵の殻を伏せた萬年青の鉢が見えてゐる。こんな事を、幾分かの注意を拂つて見た爲めに、歩調が少し緩くなつて、家の眞

ん前に來掛かるまでに、數秒時間の餘裕を生じた。

そして丁度眞ん前に來た時に、意外にも萬年青の鉢の上の、今まで鼠色の闇に鎖されてゐた背景から、白い顔が浮き出した。しかもその顔が岡田を見て微笑んでゐるのであつた。

それからは岡田が散歩に出て、此家の前を通る度に、女の顔を見ぬことは殆ど無い。岡田の空想の領分に折々此女が闖入^{ちんにふ}して來て、次第に我物顔に立ち振舞ふやうになる。女は自分の通るのを待つてゐるのだらうか、それともなんの意味もなく外を見てゐるので、偶然自分と顔を合せることになるのだらうかと云ふ疑問が起る。そこで湯歸りの女を見た日より前に^{さかのぼ}溯つて、あの家の窓から女が顔を出してゐたことがあつたか、どうかと思つて考へて見るが、無縁坂の片側町で一番騒がしい爲立物師の家の隣は、いつも綺麗に掃除のしてある、寂しい家であつたと云ふ記念の外には、何物も無い。どんな人が住んでゐるだらうかと疑つたことは慥かにあるやうだが、それさへなんとも解決が附かなかつた。どうしてもあの窓はいつも障子が締まつてゐたり、簾が降りてゐたりして、その奥はひっそりしてゐたやうである。さうして見ると、あの女は近頃外に氣を附けて、窓を開けて自分の通るのを待つてゐることになつたらしいと、岡

田はとう／＼判斷した。

通る度に顔を見合せて、その間々にはこんな事を思つてゐるうちに、岡田は次第に「窓の女」に親しくなつて、二週間も立つた頃であつたか、或る夕方例の窓の前を通る時、無意識に帽を脱いで禮をした。其時微白^{ほのじろ}い女の顔がさつと赤く染まつて、寂しい微笑の顔が華やかな笑顔になつた。それからは岡田は極まつて窓の女に禮をして通る。

參

岡田は虞初新誌^{ぐしよんし}が好きで、中にも大鐵椎傳^{だいてつゐでん}は全文を誦誦することが出来る程であつた。それで餘程前から武藝がして見たいと云ふ願望を持つてゐたが、つひ機會が無かつたので、何にも手を出さずにゐた。近年競漕をし始めてから、熱心になり、仲間に推されて選手になる程の進歩をしたのは、岡田の此一面の意志が發展したのであつた。

同じ虞初新誌の中に、今一つ岡田の好きな文章がある。それは小青傳であつた。あの傳に書いてある女、新しい詞で形容すれば、死の天使を闖の外に待たせて置いて、徐かに脂粉^{よまほひ}の粧を

凝すとも云ふやうな、美しさを性命にしてゐるあの女が、どんなにか岡田の同情を動かしたであらう。女と云ふものは岡田のためには、只美しい物、愛すべき物であつて、どんな境遇にも安んじて、その美しさ、愛らしさを護持してゐなくてはならぬやうに感ぜられた。それには平生香奩體かうれんたいの詩を讀んだり、sentimentalサンチマンタルな、fatalisticファタリスチックな明清の所謂才人の文章を讀んだりして、知らず識らずの間にその影響を受けてゐた爲めもあるだらう。

岡田は窓の女に會釋あしやくをするやうになつてから餘程久しくなつても、其女の身の上を探つて見ようともしなかつた。無論家の様子や、女の身なりで、圍物かこひものだらうとは察した。併し別段それを不快にも思はない。名も知らぬが、強ひて知らうともしない。標札を見たら、名が分かるだらうと思つたこともあるが、窓に女のゐる時は女に遠慮をする。さうでない時は近處の人や、往來の人の人目を憚はばる。とう／＼庇の蔭になつてゐる小さい木札に、どんな字が書いてあるか見ずにゐたのである。

窓の女の種姓しやうは、實は岡田を主人公にしなくてはならぬ此話の事件が過去に屬してから聞いたのであるが、都合上こゝでざつと話すことにする。

まだ大學醫學部が下谷にある時の事であつた。灰色の瓦を漆喰しつぐひで塗り込んで、碁盤の目のやうにした壁の所々に、腕の太さの木を豎に並べて嵌めた窓の明いてゐる、藤堂屋敷の門長屋が寄宿舎になつてゐて、學生は其中で、ちと氣の毒な申分だが、野獸のやうな生活をしてゐた。勿論今はあんな窓を見ようと思つたつて、僅かに丸の内の櫓に残つてゐる位のもので、上野の動物園で獅子や虎を飼つて置く檻の格子なんぞは、あれよりは遙はるかにきやしやに出來てゐる。

寄宿舎には小使がゐた。それを學生は外使に使ふことが出來た。白木綿の兵古帶に、小倉袴を穿いた學生の買物は、大抵極まつてゐる。所謂「羊羹」と「金米糖こんべいたう」とである。羊羹と云ふのは焼芋、金米糖と云ふのははじけ豆であつたと云ふことも、文明史上の參考に書き残して置く價值があるかも知れない。小使は一度の使賃として二錢貰ふことになつてゐた。

この小使の一人に末造と云ふのがゐた。外ほかのは鬚ひげの栗の殻のやうに伸びた中に、口があんこり開いてゐるのに、此男はいつも綺麗に剃つた鬚の痕の青い中に、唇くちびるが堅く結ばれてゐた。